

# ボランティア ニュース



16年11月10日(水)No.1



## 関越自動車道全線開通も・・・

9/23の新潟中越地震から2週間あまり過ぎました。一般車両の一部通行規制がされていた関越自動車道は、先週末から全線開通となりました。しかし、震源地に近づくにつれて路面の補修箇所が増し、小出インターから先は一車線規制。路肩は沈み、看板は傾くなど、いまだに多くの傷跡を残していました。

## ボランティアセンターで受付

川口町では、川口中学校隣の高齢者施設にボランティアセンターが設置されています。この日も、日本各地からボランティアの志願者がぞくぞくとやってきました。どんなボランティアの仕事をするかは、次のような流れによって決まります。まずはどんなニーズ(被災者からの要望)があるかが最も重要となります。志願者は受付で登録、ボランティア保険に加入後、決められた場所で待ちます。すると、マッチングと呼ばれる活動スタッフ、ニーズに最も適する人員をさがし、仕

事を割り当てていきます。例えば、「美容師さんいますか?」「トイレ清掃男女4名」「瓦の片付け男性6名」などの声に、志願者は次々に「はい」と自分から手を挙げ名乗り出ていきます。

学生風の若者、年配の女性、初老の男性など、まさに様々な人たちが集っていました。仕事内容を選ばず、志願していく姿に圧倒されている自分が恥ずかしく思えた一瞬でした。



## 想像以上の被害だった川口町

最初の仕事は、2km先の家庭まで、徒歩での物資配達でした。単独での活動は禁止のため必ず複数で行動します。川口駅付近へ向かうと、そこは予想を上回る被害がありました。建物の倒壊や地割れは、テレビや新聞でよく報道される山古志村などの一部の山間部だけかと思っていましたが、道路は激しくひび割れ、倒壊によって押しつぶされたガレージの車、崩

れた石垣や塀、至る所で家屋に赤札(立ち入り危険)が貼られていました。さらに、川口町では未だに全戸でガスと水道が止まったままです。倒壊や半壊を免れた家も、大きな余震が続くため、自宅で寝泊まりできずに、当たり前のようにテント生活を続けている姿に心が痛みました。

## **活動中に震度5強**

配達先の民家(黄札:立入注意)の一階ガレージで、二人の小さな子供と遊び、お婆ちゃんと会話している最中に、突然「ドスン！」と突き上げるような音とともに「グラグラ」と大きな揺れが。建物がミシミシ音を立てきしんだ。「お婆ちゃん！早く外に！」と慌てて抱え出しました。母親も、二人の子供を両脇に抱え、掛け出ていました。その後も震度4と震度3が立て続け4回ほどありました。道に立っていてもその揺れは感じられ、傾いた電柱がさらに大きく揺れている様子にかなりの恐怖を感じました。

## **ペットボトルの水を配達**

次の仕事は、数km先にある小学校の避難所に、水を配給に行きました。水の箱をワゴン車に積み込み、一般車両は通行止めの地域にある避難所に届けました。

## **2週間ぶりの学校再開**

8日(月)から町内の小中学校が2週間ぶりに再開しました。しかし、水道も復旧していないため、半日授業での再開でした。二人の児童が亡くなった川口小では、全校児童が朝礼で黙とうを捧げたそうです。ご冥福をお祈りします。

## **駐車場整理**



午後の活動として駐車場の整理をさせていただきました。4時間休みなしの立ちっぱなしで頑張りました。全国各地からボランティアが集ってくるため、河川敷の通路がその駐車場となっています。河川敷には車の他、長期滞在者が寝泊まりするテントも数珠なりに張られています。神戸の人をはじめ、北海道や九州からも来ていました。

## **のびのび隊に参加**

最終日は、被災によって遊び場を失ったり精神的なショックを抱える子供たちと、共に遊ぶことを通して心のケアをめざした「のびのび隊」に参加させていただきました。

午前はまだ保育園が始まっていないために、保育士の先生と共に学齢前の子供たちとお絵かきや折り紙をして遊びました。夢中になって遊ぶキラキラした大きな瞳と笑顔がとても印象的でした。

午後は、他の地域に移動し、公民館で避難生活をしている小学生と遊びました。余震の危険から自由に遊びに行けず、安全な遊び場は、公民館の敷地に張られた小さなテントの中と、近くのお寺の庭くらいでした。それでも、異年齢の子供たちとみんなで工夫しながら余震の恐怖を忘れて楽しく遊ぶことができました。

## **近所に住む中学生の声**

午後になって近所の中学生の女子二人が、公民館に物資を取りに来たついでに、子供たちと遊んでくれました。「予定されていた文化祭も合唱祭もすべて中止になってしまった。『心の瞳』を歌いたかった」と残念そうに話す姿が印象的でした。



## 現地での撮影は禁止

現地での被災の様子を写真に写すことは禁止としています。被災者のプライバシーや心情面の配慮をして、みんなで守っています。訳を話して許しを得て少しだけ撮影させてもらいましたが、少しは片づけたといいながらも、足の踏み場もない状況に心が痛みました。窓のガラスだけでなく、枠のきしみですべての障子紙が破けて

いるのを見て、想像をはるかに超える揺れだったことを思いました。

# ボランティア ニュース



発行：平成16年11月25日(木)No.2

11/22 毎日新聞より



## 避難勧告は解除・・・でも

地震の発生から一ヶ月が経過し、多くの地域で避難勧告が解除になりました。これによって、住民の多くは我が家に戻れるのでしょうか。山古志村など一部の地域のように世帯の大半が全壊してしまった地域だけでなく、まだまだ多くの住民が帰る家もなく、避難所での生活を強いられているのが現状です。

私が見てきた川口町でも想像以上に被害が大きく、道路はいたるところでひび割れ陥没し、あちらこちらで家が倒壊するなど、災害の痛々しい傷跡が残っていました。倒壊は免れた家であっても、軒並み柱は傾き壁はひび割れており、すぐに住める状態ではないと思われる家がありました。この地域は日本でも有数の豪雪地域です。余震は無くなっても、地震によって傷んだ家が、雪の重みに耐えられるのか、とても心配になってしまいました。

## 義援金の方が

救援物資の受け入れを中止する自治体が多くなってきました。全国各地から救援物資が届き、食料や毛布など避難所で緊急に必要な物資が一通り確保できたこと、幹線道路の整備とともに物流が復旧し、その他必要な物資が確保できてきたことが主な理由だそうです。「新たな需要に対応しやすく保管も便利な義援金の方が現状では助かる」との声が多くなってきています。



## **物資は足りているはずなのに**

現地に行って気づいたことは、自治体の対応の問題や、自治体とボランティアセンターとの関わりの難しさです。全国から届いたたくさんの救援物資の配給もなかなかうまくいっていないということです。例えば、ボランティアセンターに寄せられるニーズの中には、「炊飯器が欲しい」というものがありました。電気が復旧し、水やお米が配給されてもご飯が炊けないというのです。自治体の対応は、炊飯器をわたす家庭とわたさない家庭があってはいけないので、一律でない対応は難しいというのです。他にも自分が「のびのび隊」として派遣された公民館でも、プロパンガスは準備されたのにコンロまでのわずかな配管の不備からガスが使えず困っていました。自治体に連絡すると、町内のガス会社を紹介してくれるのですが、近隣のガス会社は工事に追われて、連絡すらつかない状態が続いているというのです。ボランティア志願の中には、全国各地から駆けつけたガス会社関係もたくさんいるのに、自治体として公の仕事をそれらの会社に振り分けられない難しさがあることが分かりました。緊急事態の中なので、もう少し融通のきく良い方法はないものかと願うばかりでした。



## **つらい避難所生活**

全国各地から集まってくる復旧支援ボランティアの志願者たちは、日帰り、短期滞在、長期滞在など様々です。宿泊を伴う場合、水や食料、寝る場所などの確保は自分自身での調達が原則です。ただ最近では、寝袋等を持参すれば、空いた避難所スペースを利用できるよう。自分は車の中で2泊しました。しかし、河川敷の駐車スペースは、同時にテントの張り場所でもあるため、まわりへの配慮からエンジンをかけて暖をとれず、寒さもさほど厳しくない11月上旬にもかかわらず、朝方の冷え込みは厳しく、激しい余震で目が覚めると寒くてなかなか寝付けませんでした。そして、わずか二晩車の中で過ごただけなのに、その疲労感は相当大きくて、ぐったりといった感じでした。避難所での長期間の生活を強いられている被災者の方のことを考えると、我が家の布団で寝ることができないつらさというものは、私たちの予想をはるかに越えるものであるに違いありません。地震発生から一ヶ月が経過し仮設住宅への入居が始まったようです。しかし、まだテントや避難所で生活をしている人がたくさんいるということを忘れてはいけないと心に言い聞かせました。

## **「バイク隊」が活躍**

「バイク隊」とは、各地で道路が傷んでいて車での通行が困難な道でも、オートバイなら通行が可能という道路がたくさんあります。そこで、小回りのきくオートバイの利点を最大限に生かして、被災者のいる避難所を回り、重要書類や物資を届けたり、事務連絡に走ったりと全国各地から集まったライダーたちが大活躍していました。普段はオートバイを乗り回して遊んでいるような若者が次々と自分に与えられた任務に出かけていく姿に感動しました。



## **まだまだ続く「のびのび隊」の活躍**

被災によって遊び場を失ったり精神的なショックを抱える子供たちと、共に遊ぶことを通して心のケアをめざした「のびのび隊」に参加し、そこでリーダーとして活動している方の話を聞く機会がありました。「今後町が復興し、住民の自立が進むにつれて、ボランティアセンターの仕事は縮小していきます。だけど、おそらく一番最後まで残ると思われるのが、のびのび隊でしょう」

つい先日、新潟県災害救援ボランティア本部のホームページを見ました。そこには「のびのび隊員募集」の掲示がありました。内容を見ると、「のびのび学校を開設しました。9時から4時まで、いつでもお子さんをお預かりします。仕事に出かける間、ちょっと買い物に行く間、

時間の長短に関係なくご利用ください」とありました。当初は子供たちの遊び場の提供や心のケアが中心でしたが、こんな風にニーズに応じて対応していくのがボランティアにとって大切なんだと実感しました。